

本人が息子を見て、「この人はよく似ているけれど私の息子ではない」と言い息子を探し続けることがある。

一旦その場を離れる	<input type="checkbox"/> 一旦その場を離れ、しばらく時間を置いて「お父さん（お母さん）、娘（息子）の〇〇よ」と呼びかける。 POINT! 一旦離れて再登場することで修正できることがあります。
本人の世界を確認する	<input type="checkbox"/> 本人の話を受け止める（本人に、今何歳になったと尋ねると、19歳と回答された。19歳だったら息子を息子とわからなくてもしょうがないと納得できた。） <input type="checkbox"/> 認知症になって、息子を息子とわからなくなっても、息子を気がかりに思う気持ちや息子への愛情は失われていないという点に注目する。 POINT! 認知症の人が家族のことをわからなくなってしまうのは、家族にとってはとても残念な出来事の一つです。認知症の人の世界を確認・想像することで納得できるきっかけが得られることもあるようです。
家族写真を並べておく	<input type="checkbox"/> 家族写真を見えるところに貼っておき、ヘルパー等の在宅支援の際に、本人に質問して意識づけしてもらう。 POINT! 息子の成長が分かるようにしておく。小さいころから順にならべておく。息子と会う日の前にオリエンテーションしておく。写真を使って、大きくなったね。などと伝える方法があります。正しい間違いを判断するための道具にしないようにします。



～こんなこともありました（介護職員からの情報提供）～

誰にでもうまくいく方法ではありませんが、家族写真を見えるところに貼っておき、ヘルパー等の訪問の際に、本人に「この人は息子さんですか？」などと質問することで、その直後は家族を家族とわかるようになったという事例はありました。その時は、写真を小さいころから順番に並べ、お子さんの成長過程が分かるようにしてお話をしました。

笑顔で過ごしたい

認知症の人と家族のための暮らし方のヒント



⑯事実と違うことを事実とを感じる時には

こんな場面ありませんか？

- ・本人が家族を見て「あなたは本物じゃない」と言い、家族が戸惑う場面
- ・「昨日食事に行った」、「ずっと家にいた」など本人と家族で食い違う



この冊子では、現場での実践や支援の知を参考に認知症の人と家族がとともに暮らすときのヒントをまとめています。

■順番に読む必要はありません。気になるところから使えます。

■すべてを行う必要はありません。合うものだけ選べます。

■うまくいかないときは、やり方を変えても大丈夫です

本冊子は、国立研究法人「医療研究開発機構（AMED）」の認知症開発研究費「血液バイオマーカーと神経画像検査によるBPSDの生物学的基盤の解明、および認知症者の層別化に基づいたBPSDケア・介入手法の開発研究」の分担研究「BPSDケアレジ研究とJ-BIRD-PNBにおける非生物学的収集項目決定と質管理」の成果物として作成しました。
 本冊子の作成にあたっては、認知症介護研究・研修仙台センター開発「初めての認知症介護」の構成を参考にしました。

Q. どうして起こっていないことを起こったように思えてしまうの？



A. もの忘れをするが、昔のこと・大切してきたことは覚えているため

最近体験した出来事を忘れても、過去の出来事は記憶に残っていて、最近の出来事を忘れたという自覚が持てない場合があります。例えば、昨日外出したことは覚えているものの、何をしたかは昨日のことでも思い出せない。過去に仕事をしていて外で取引などをしてきた記憶が強く残る、というときに、「昨日外出して取引先の人にごちそうした」などと記憶が混乱することがあるかもしれません。

Q. よく似ているけど別人だ、などと思ってしまうの？

A. 見え方・感じ方が変わることがあるため

誰かが別人に置き換えられたと信じたり、本物の家族を見て偽物だと感じられることがあります。

試してみたいこと

1. 否定しないで聞く

そんなことないよな、と思っても事実を正さず、本人の気持ちに寄り添って聞くようにします。

2. 専門職に頼る

お互いにつらさを感じる時は抱え込まず、ケアマネジャーやホームヘルパーなど専門職に相談しましょう。介護サービスを使っていない時は、まず近くの地域包括支援センターに連絡してみてください。

3. 気持ちを聞いてもらう

つらいときは今の気持ちを一言だけ口にしてみるのも一つの方法です。自分の気持ちを抱え込まず、できるだけ共有していくことで、徐々に気持ちを軽くすることができます。本人ミーティングや家族会に参加して同じ体験をもつ人に話すのもおすすめです。

おすすめしない伝え方



- 頭ごなしに否定すると、訂正できず、感情のぶつけ合いになってしまう場合があります。
- 「私のこと分かる」など試すような声掛けは不安を助長し、逆効果となる場合があります。

試してみたいこと

認知症の人が実際に起こっていない話を繰り返すとき。

例：昨日買い物に行って取引先の人にごちそうしたんだよ、など

興味を持って聞く	<input type="checkbox"/> 「それでどうしたの？」など、興味を持って尋ねてみる。 POINT! 昔、自分が輝いていたころに戻ってお話されている可能性がありますので、ご本人の知らない一面を知れる機会と思って尋ねてみます。
軽く聞く	<input type="checkbox"/> 「そうなんだ〜。」「よかったね〜。」など相槌を打ちながら、受け流すくらいの軽い気持ちで話を聞く。 POINT! 家族の立場だと興味を持って聞くことが難しい時もあります。先と同じ話ねと気づいたときは、無理せず受け流すのも一つの方法となります。
関わる人を増やす	<input type="checkbox"/> ケアマネジャーに尋ねて、傾聴ボランティアに来てもらったり、認知症カフェに参加したりする。 <input type="checkbox"/> 近所の人や、親戚に来てもらい話し相手になってもらう POINT! 本人と家族が毎日一緒にいて他の人に会わないと関係が悪くなりがちです。いつも会う人を増やすのは一つの方法です。
順番に経緯を確認する	<input type="checkbox"/> 買い物は何を買ったのか、レシートを確認したり、どこで何を食べたかを順番に話す。 POINT! 初期の認知症の人向けです。起こっていないことは、順番に経緯を確認していくと、認識が修正できることがあります。ただし、本人や周囲の人に特に害がないようであれば、無理に訂正する必要はないでしょう。



ワンポイント

まずは「気持ちを伝えられる相手を作る」から始めると、その他の取り組みに進みやすくなります。腹がたったり、残念だったりといった気持ちは、誰かに気持ちを伝えてみてください。専門職は、話を聞くトレーニングを受けているのでまず気持ちを吐き出す相手としてはお勧めです。